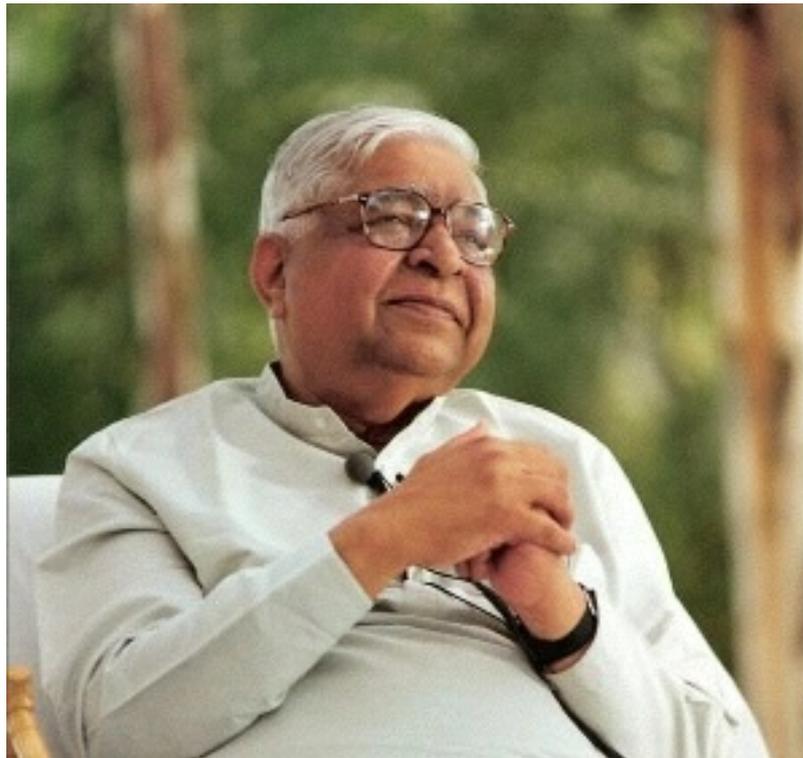


内なる平和の使者：サティヤ ナラヤン ゴエンカ



(写真) サティヤ・ナラヤン・ゴエンカ 師

1924年1月30日 — 2013年9月29日

あれは、2000年8月も終わりにさしかかる、長い一日の午後でした。ニューヨークの国連一般会議ホール、「ミレニアム国際平和会議」の参加者たちは、うんざりとし、やや疲れきっていました。世界中の宗教や精神的リーダーたちの、国連での国際集会は初めてのことで、それはしんらつな言い争いの場になっていたのです。代表者たちは、改宗の問題について互いの共通点を見つけるところか、宗派にこだわり、意見はバラバラでした。ある代表者は、そのやり方に極めて批判的であり、また別の宗教リーダーは、その見解を拒否するのです。

この会議場では、長年、政治家などによる論争が繰り広げられたものですが、宗教や精神的なリーダーたちが同様であるのを目の前にし、落胆の思いでした。

会議の閉会のスピーチのために、アシスタントに支えられて壇上に向かったのは、そうした代表者たちほどには名を知られていない、インド風スーツをスマートに着こなした銀髪の人物です。彼は、入念にまわりに敬意を表し、微笑みながら聴衆を見回しました。そして話し始めるやたちまち、その場のお偉方の注意を惹きつけたのです。

「宗教は、団結しあってこそ、宗教といえます」彼は話し始めました。「分裂していても、もはや宗教ではありません。宗教は人びとを分裂させるものではありません。それは、人びとを団結させるものなのです」

この言葉を受け、突然、拍手喝采が起こりました。一日中続いていた論争とは異なる彼の言葉に、代表者たちは耳を傾け始めました。

スピーチは続きます。「改宗について、賛否両論がありました。私は、改宗に、反対ではありません。ただし、その改宗とは、ある宗教から別の宗教に、という意味ではありません。それは、苦しみから幸せへの改宗です。束縛から自由への改宗、無慈悲から思いやりの心への改宗です。これこそ、今日、必要とされる改宗なのですから」スピーチの一節ごとに拍手が起こり、彼は話を詰めていきます。

「私自身の心が怒りや憎しみ、悪意や敵意に揺れていては、いったいどうやって世界に平和をもたらすことなどできるでしょうか？」

「だからこそ、世界中の賢者や聖者は、『己を知れ』と言ったのです」

「それは、ただ頭で考えたり、感情や信仰心のレベルではなく、現実のレベルで知ることです。実体験のレベルで自身の真実について知るとき、多くの問題が解決します。そうすることで、人は自然、あるいは神の普遍的な法を理解し始めるのです。それはすべての生き物に共通する法です」

「私が自分自身を観察し、心が怒りや悪意、敵意を生み出していることに気づくと、自分の内にある憎しみや敵意の最初の犠牲者は、私自身だということがよくわかります。ほかの人を傷つけ始めるのは、その後です。そして、それらの悪い感情から自由であれば、自然もしくは全能の神は私にご褒美をくれます。それは、とても平和な気持ちになることです」

「私が自分をヒンズー教徒と呼ぼうと、イスラム教徒、キリスト教徒、ジャイナ教徒と呼ぼうとも、何の違いもありません。人は人であり、人の心は人の心であることに変わりはありません。改宗とは、不純な、汚れた心から、純粋な心への改心であるべきです。これこそが、今必要とされている改宗なのです」

ここでスピーチの時間切れを知らせる鐘がなりました。が、彼は、自国の昔の王のメッセージを伝えたいと、延長を頼みました。王の言葉を引用し、意識としてこう話しました。

「すべての宗教は、愛と慈しみ、善意という健全な核心をもっています。外側の殻はそれぞれ異なりますが、内側の真髄に重きをおけば、争いはおきません。他を一切非難しないこと、そしてすべての宗教の真髄を大切にすること、そうすれば、真の平和と調和が訪れるでしょう」

引用されたのは、二千年あまり昔、インドのアショーカ大王が発した言葉で、世界で最初の、異なる宗教間の寛容を促すメッセージでした。そして、このスピーチの主は、つねにアショーカ大王を英雄として尊敬し、彼自身も内なる平和への道の指導に生涯を捧げた人物、サティヤ・ナラヤン・ゴエンカでした。

子ども時代

ゴエンカ師の、内なる平和のメッセージを伝える長い旅は、1924年、ミャンマーの元首都であるマンダレーで始まりました。大英帝国がシバウ王の王位を剥奪し、国外追放してから40年も経ていない時期です。王の追放後まもなく、ミャンマーにはインドから移住者が波のように押し寄せましたが、その中の一人がゴエンカ師の祖父にあたる人でした。彼もほとんどの新移民と同様に、富を築こうと移住してきたのです。しかし、率直かつ正直で、スピリチュアルな人だったので、自身はヒンズー教徒でしたが、ミャンマーの人や伝統文化に深い敬意を抱くようになりました。

そして、その敬意を孫のゴエンカ師に伝えました。ゴエンカ師は、まだ子どもの頃、祖父に連れられてマンダレー郊外の有名なマハー・ミヤット・ムニ・パゴダを訪れたことを追想しています。祖父が目を閉じ、静かに思いにふけりながら座っているのを、子どもだった彼は、周りの穏やかな雰囲気を感じながら、我慢強く眺めて待っていたそうです。そしてその敬意は、心の中で、生まれ故郷ミャンマーへの限りない愛へと変わり、彼の長い一生の間、一度も褪せることはありませんでした。

少年は成長し、高等学校をクラス首席で卒業しました。そのまま進学するという進路にも惹かれましたが、責任感から、家業の織物関係のビジネスを継ぎました。その後、第二次世界大戦の荒波が押し寄せ、1942年、日本軍がミャンマーを侵略すると、彼は安全のために親戚、家族の大勢を引き連れて山とジャングルを抜けてインドに渡りました。彼らは運良くインドへたどり着きましたが、その旅は厳しく、同様の旅路では何千人もが命を落としたのです。

ゴエンカ師一家は、友人の助力でインド南部で新生活を始め、戦時中の年月をそこで過ごしました。日本の敗戦、退却の後にはミャンマーに戻りましたが、その頃にはゴエンカ師は20代の若者になっていました。彼はすぐに卓越したビジネスの力量を発揮し、インド人コミュニティのリーダーに成長します。しかし、ゴエンカ師自身がよく語られているように、そうした富や名誉が心の平和をもたらすことはありませんでした。逆に、精神的ストレスから激しい偏頭痛に悩まされ、唯一の治療法は、中毒性の強いモルヒネの処方のみでした。ゴエンカ師は、名医の診察を受けるために日本やヨーロッパ、アメリカへと訪ね渡りましたが、どの医者も助けることができませんでした。

ヴィパッサナーとの出会い

ちょうどその頃、ある友人から数年前にサヤジ・ウ・バ・キンが設立したという、ミャンマー北部の国際瞑想センターを訪ねるように勧められたのです。ウ・バ・キンは、貧しい出自ながら、ミャンマー政府の高官に出世し、その誠実さと優れた能力で有名でした。と同時に、古代から一連の仏教僧たちによってミャンマーに伝承されてきた、自己観察法・ヴィパッサナーの在家指導者でもありました。

ゴエンカ師は友人の勧めに従い、瞑想センターを訪ねて何が指導されているのか見てみることにしました。まだ若いゴエンカ師がやってくるのを目にしたウ・バ・キンは、彼がヴィパッサナー指導者の自分にとって、その使命を果たすために、非常に役に立つ人物であることが分かりました。

にもかかわらず、ウ・バ・キンは、ゴエンカ師の10日間コースへの参加の申し出を拒みました。ゴエンカ師が、偏頭痛を和らげるために参加したい、と率直に話したからでした。「体の病を治すために行うことは、この瞑想法の価値を貶める行為です」と、ウ・バ・キンは言いました。「緊張し、苦しんでいる心を解放するために参加しなさい。そうすれば、体も自然に恩恵を受けるでしょう」

ゴエンカ師は同意しました。そして数ヵ月間迷った後、1955年、初めてのコースに参加しました。2日目には逃げ出したくもなりましたが、我慢強く残り、結果として、夢にも思わなかった恩恵を得たのです。そして、その後終生、ゴエンカ師は朝の詠唱においてウ・バ・キンへの限りない感謝の意を表し続けます。

以降、ゴエンカ師は定期的に国際瞑想センターを訪れるようになり、大勢の親戚や友人を連れていきました。彼は瞑想とともに事業にも励んでいましたが、1963年、ミャンマーの新しい軍事政府が事業の国有化を展開したため、事態は一転してしまいます。一夜にして、設立した数々の工場と財産の多くを失ってしまい、また彼の名前は、処罰対象の資産家リストにも載せられたのです。ところが、ゴエンカ師はこの事態を微笑んで受け入れ、雇用者には国のために一生懸命働くように励ましたのです。そして、次のような句を詠みました。

それが自然の意志であるのなら・・・

私の体のすべての粒子が

この聖なる地の埃と交わるように。

また、私が生きながらえることが自然の意志であるのなら、

命ある限り呼吸の一つ一つが、母なるこの地への感謝に満ちたものであるように。

(オリジナルのラジャスタン語意訳)

黄金時代

結局、人生の危機は過ぎ去り、ゴエンカ師がのちに彼の「黄金時代」と呼ぶ日々が始まります。事業を引退して自由になったため、先生のウ・バ・キンと過ごす時間が増え、解脱への教え、ダンマに身を浸すようになったのです。ゴエンカ師自身には、それで十分満足でした。しかし、ウ・バ・キンには別の考えがありました。古くからの予言に、ブッダの2500年後、この教えがミャンマーから発祥の地、インドに戻り、そこから世界中に広がっていく、と言い伝えられていたのを覚えていたのです。

ブッダの教えの真髄であるヴィパッサナー瞑想法を、インドで再興することこそ、ウ・バ・キンの最大の望みでした。残念なことに、1960年代当時のミャンマー政府は、自

国民が海外に出ることを通常許可していなかったのです。しかし、ゴエンカ師はインドの家系でしたので、許可をもらえる可能性がありました。

そして1969年、チャンスが到来しました。ゴエンカ師の両親はすでにインドへ移っていたのですが、母親は病気に罹っていました。そのため、ミャンマー政府はゴエンカ師にインド渡航のパスポートを許可すると伝えました。

ゴエンカ師がインドに旅立つ前に、ウ・バ・キンは、彼を正式にヴィパッサナー指導者として任命しました。ミャンマー在住のインド人コミュニティ対象の2回のコースで、ゴエンカ師はウ・バ・キンと並んで指導を行います。コースの場所は、ゴエンカ師がインドで直面するであろう状況を勘案して選ばれました。最初のコースは、マンダレーの繁華街にあるビルの屋上です。ビルは二つの映画館に挟まれ、そこから映画音楽が騒がしく聞こえていました。宿舎は竹のスノコ製の小屋でしたが、生徒たちはそれを気にすることもなく、ゴエンカ師にとっても最高の指導者の先生からトレーニングを受けられる何よりの幸運でした。

ウ・バ・キンの傍らで、ゴエンカ師は初めての講話を行い、その後それは通例となりました。参加者がインド人だったので、講話はヒンズー語で行われました。サヤジはヒンズー語を話すのは得意ではないものの、聴くことはよく理解していたので、たびたびゴエンカ師に肩を寄せ耳打ちし、「今だ、ブツダの弟子たちの話をしなさい！ マザー・ヴィサーカーの話を！」「アングリーマーラの話！」などと指示を出していたそうです。するとゴエンカ師は、それまでしていた話をさっと切り上げ、先生に言われた通りに話し始めます。のちにゴエンカ師が述べているように、こうして話をするのは蛇口をひねるような簡単なことで、言葉が自然に口から流れ出てきたそうです。

インドへ

1969年、ゴエンカ師はヤンゴンからインド・コルカタ（カルカッタ）行きの飛行機に搭乗しました。別れに際し、サヤジはこう言いました。「行くのは君ではなく、私であり、ダンマなのだ」

ウ・バ・キン自身はミャンマーを離れることができませんでしたが、彼は自分の弟子をその代理、ダンマ ドゥータ（パーリ語で「ダンマの使者」）として送りだしたのです。

ゴエンカ師にも、これが歴史の節目となることは分かっていたのですが、それでも、インド訪問は短いもので、すぐに尊敬する先生と愛する故郷に戻れると強く思っていました。しかし、実際にミャンマーに戻るのには、20年以上過ぎた後のことでした。

ゴエンカ師は、知り合いの少ない、ブツダの教えも尊ばれていない地に到着しました。ここではヴィパッサナーという言葉さえ忘れ去られていたのです。しかし、家族の協力を得て、まもなくムンバイで最初の10日間コースを行いました。参加者は彼の両親のほかはわずかでしたが、そのなかに1人のフランス人女性がいました。コース最終日、彼女はゴ

エンカ師を自国に招待したのです。ゴエンカ師は彼女に、10年後にもう一度声をかけるように、と伝えたのでした。

最初のコースの後も、次から次へとコースは続き、こうして「ダンマの輪」はその発祥の地で回り始めます。そこにはヴィパッサナーを学びたいと切望する人びとがおり、彼はダンマの使者としてその人たちを拒むことはできなかったので、ミャンマーへの帰国は後回しになっていきました。ゴエンカ師はインド中をめぐり、その多くは混雑した三等車輦での旅でした。手伝いの古い生徒はおらず、ゴエンカ師自身が生徒の部屋割りをし、食事時には生徒とともに座るか、自ら生徒たちに給仕をしました。しばしば、テントが瞑想ホールの代わりに使われ、ラジギールでのある晩には、台風でテントが吹きとばされ、つぶされることもありました。そんな時でも、翌朝には、ゴエンカ師はダンマの座に坐り、瞑想者を励ますために詠唱を行うのでした。

彼の置かれた状況は、たいてい困難なものでした。所持金は乏しく、協力も少なく、当初、妻のイライチ（瞑想者からは「マタジ」と呼ばれている）はミャンマーに残っていたため、ひとりぼっちの旅でした。それでも、この世に生を受け、自分の使命を果たしている人特有の喜びで輝いていました。

こうした初期のコースは、ヒンズー語のみで行われていました。ゴエンカ師は英語も知ってはいたのですが、ビジネス用に学んだだけでしたので、ヴィパッサナー瞑想法の指導には不十分だと考えていました。しかし彼の功績が知られるにつれ、インド人以外の外国人が指導を求めて押し寄せてきました。1960年代後半、1970年代初めには、自分の求めているものが何かははっきりと分からないまま、それでも何かを求めてインドにやってくる西洋人が大勢おり、その中の数人がゴエンカ師にコースへの参加許可を求めてきました。しかし、師ははじめ、語学力の不足を理由に断りました。彼らはそれでも諦めず、ミャンマーのウ・バ・キンに手紙を送ります。まもなくヤンゴンから、ゴエンカ師に英語でコースを提供するように命じる手紙が届き、ゴエンカ師はいつも通り、先生の意思に従いました。

最初の英語コースは、1970年10月、ヒマラヤ山脈の保養地、ダルハウジーで行われました。ダルハウジーと、その後、ブッダが悟りを開いた地であるブッダガヤには、大勢の若い西洋人が途切れることなくゴエンカ師を訪れるようになります。なかにはヒンズー教の苦行僧のように、髪をもじゃもじゃにし、半裸の格好や、まるでビーチに行くような格好の人もいました。たいていの男性はヒゲをはやし、女性はというと、インドでは良家の女性はきちんと髪を結わえておくのですが、長い髪を背中に垂らしたままです。このようにインドの風習からみれば、だらしのない格好の人ばかりでしたが、ゴエンカ師は彼らの身なりを気にすることなく、来る人すべてとダンマの宝を分かち合いました。10日間コースを1回受けた後、もう二度と戻って来ない人たちもいましたが、ゴエンカ師の後について国中を旅してまわる人たちもいました。そのなかには、のちに他の瞑想法で有名になる人も混じっていましたが、中には、今はゴエンカ師に任命されたなかでも最年長にあたる指導者たちもおりました。

まもなく、西洋人旅行者向けのカフェやレストランに、ヴィパッサナー・コースのポスターが貼られるようになります。ゴエンカ師は彼特有の味わい深い、音楽的な話し方から、しばしば「歌うグルー」と呼ばれていました。師はブッダの教えに関する古代の詞章を詠唱したり、自作の韻文をヒンズー語やラジャスタン語で詠唱しました。肌寒い早朝や夜遅い時間に、静まった瞑想ホールで、その声は心地よく空気を揺るがせ、瞑想者を勇気づけ、導きました。

コースの開始時、ゴエンカ師はホールに入ってきて坐り、生徒が自分の席を見つけて座に落ち着くまで、静かに待っています。そして彼がいったん口を開くや、古ぼけたレンタルの部屋や穴だらけのテントが一瞬にして異空間に変わり、生徒はその場で自分の内なる真実の探求に没頭します。ゴエンカ師は、何時間も続けて生徒とともに坐り、詠唱、終日の指導、夜の講話などすべてを行いました。ダンマは、彼の内から溢れ出てきました。

夜9時、その日の日程が終了します。外は冷え始め、長い一日を終えた生徒は疲れきっていました。しかし、ほとんどの生徒がホールに留まっていた。夜の質疑応答タイムを逃したくないからです。生徒は、列に並ぶか、ゴエンカ師の席近くに集まります。明らかに挑戦的な、ゴエンカ師と議論をしたがる質問者もいれば、本当に困惑したり動揺している生徒もいました。また自分の見解が正しいと確認したい人もいれば、師が間違っていると主張したがる人もいました。そうしたすべての人、一人ひとりに、ゴエンカ師は優しく微笑みながら応じ、笑うこともしばしばありました。たいていの場合、生徒のほうも一緒に笑い出します。彼らは、何を言われたか、言葉は覚えていなくても、求めていた答えが得られたと感じたのです。

コース終了時、ゴエンカ師は最後の講話を行い、生徒とともに数分間瞑想した後、ヒンズー語で「サバ カー マンガラ — 生きとし生けるものが幸せでありますように」と詠唱しながらホールから出ていきます。彼の声がゆっくり消えていくと、そこは、瞑想者たちにとって、インドの片隅の古めかしい元のただの部屋になり、外では行商人が声を張り上げ、犬の吠え声が聞こえます。友人や恋人と再会したり、手紙を読んだり、それから電車にも乗らなくてははいけないし、予定もたてたりと、忙しい日々に戻ります。それでも多くの人にとって、自分の中で確かに何かが変わり、新しい生き方が始まったのです。

唯一の恩返し

ゴエンカ師は、師であるウ・バ・キンに頻繁に報告を行い、その報告はウ・バ・キンをとっても喜ばせました。あるとき、コースに37人が参加したという報告に、ウ・バ・キンは「悟りの37の要素と同じ37人の参加者か！」と、古代のパーリ語教典を引き合いにして喜んだそうです。また、ゴエンカ師が参加者100人のコースを指導したという報告に、ウ・バ・キンはさらに喜びました。のちに、参加者100人がわりに小さめのコースだといわれる日が訪れるとは、そのとき、誰も想像だにしませんでした。

1971年1月、ブツダガヤのミャンマー仏教院でコース指導中のゴエンカ師のもとに、サヤジ・ウ・バ・キンが最後の息を引き取ったと知らせる電報が届きました。ゴエンカ師は生徒たちに、「光が消えてしまった」と、喪失の感を隠しませんでした。しかしすぐに、ゴエンカ師はウ・バ・キンが今まで以上に強く存在しているのが分かりました。まるで、ついに、ウ・バ・キンがインドで彼と合流したかのようでした。

続けるより、他はありません。ゴエンカ師が苦しみから抜け出せないでいるとき、彼の師ウ・バ・キンは助けの手を差し出し、愛情をもってヴィパッサナーを教え、指導者になるように育ててくれました。そしてウ・バ・キンは彼を指導者として任命し、使命を与えて送り出したのです。ゴエンカ師は、この使命を終生果たし続けることを決意しました。コース中、朝の詠唱時、ゴエンカ師は毎日こう宣言しています。

私の体中から感謝の思いが溢れ出る
返しきれないほどの恩を受け、
私はダンマの人生を生き
苦しむ人びとに奉仕を続ける
すべての人びととダンマの幸福を分かち合うことー
それだけが、唯一の恩返し

そして、この言葉通りに生きたのです。インド最南部からヒマラヤ山脈、グジャラート砂漠からベンガルのジャングルまで、ゴエンカ師は旅を続けました。まわりの景色は変わり、人の顔ぶれも変わり、彼自身も変わり、年もとりましたが、彼の旅は続き、止むことはありませんでした。

ダンマの丘

初めの頃、コースはアシュラムや僧院寺、教会や学校、巡礼者向けの宿泊施設やホテルなど、安く借りることができる施設で行われていました。どの施設でもかろうじてコースはできましたが、何かしらの不都合は避けられず、コース開始時には設備の設置、終了後には解体が必要でした。そこで、ヴィパッサナー瞑想専用の場所を探し、1年中コースができるようにしようという動きが始まりました。

そのような1973年後半のある日、デオラリ町でコースを終えたゴエンカ師が、ムンバイの自宅への帰途に立ち寄ったイガットプリの町で、ある店の主と若い役所員が師の車を追いかけてきました。二人は、候補になる土地をイガットプリ郊外に数件見つけたので足を止めて一緒に見てほしい、とゴエンカ師に懇願したのです。そのとき、ゴエンカ師は怪我をした足の石膏がまだとれておらず、早く家に帰りたかったのですが、仕方なく了承しました。

最初の2件は明らかに不適切な場所でしたが、あともう1件が残っていました。車は、長年使われていないでこぼこの道を進みました。そしてところどころに巨大なマンゴーの木々が茂り、大英帝国占領時代の建物に陰を落としている丘の上に辿り着いたのでした。

建物のいくつかは壊れかけ、あるバンガローはヤギが勝手に出入りしており、丘の背景には、禿山が聳えていました。

ゴエンカ師はしばらく目を閉じていました。そして、「よいでしょう、適した場所です」と言いました。するとすぐさま、旅に同行していたビジネスマンがその土地の購入を申し出ました。これが、現在のダンマギリ、ダンマの丘のはじまりでした。

センターは細々と始まり、最初のうちは一握りの瞑想者（その大部分は西洋人でした）が宿泊しているのみでした。彼らはゴエンカ師に手紙を書き、どのように暮らしたらよいか尋ねました。ゴエンカ師はこう答えます。「瞑想しなさい、ひたすら瞑想をするのです。自分自身を磨き、ついでに瞑想センターも磨きなさい」そこで、瞑想者たちはまず、井戸から汲んだ水とタワシを手に仕事にかかります。場所が整うと、今度は一日6～8時間、瞑想に励みました。やがて人が増え始め、建設作業が始まりました。こうして1976年10月、ダンマギリが正式に開設しました。

それは心弾む時でしたが、同時に困難の日々でもありました。よくあることですが、建設費が赤字になり、トラスト委員会は契約した建設会社に借金をしていて、返済見通しがたかない状態でした。指導者用の新しい宿泊施設を建てる資金にも事欠いていました。ゴエンカ師はそのような事情を耳にすると、指導者用の施設に泊まることを拒み、妻のマタジとともに、上下水道も未整備の生徒寮に移動しました。寮の横にある浴室は竹のスノコで仕切られたただけのもので、生徒と同じようにトイレは共同でした。ダンマギリ開設後、約半年間、トラストが契約会社に支払いができるようになるまで、二人はこのように過ごしました。

そのうちに資金は増え、より多くの建物が建てられ、やがてヤンゴンのウ・バ・キンのセンターにあるパゴダをお手本に、パゴダの建設が始まりました。インドの労働者とともに、西洋人のボランティアが建設作業に加わり、ブッダガヤのミャンマー仏教院の宿直僧が装飾の左官工事の手伝いにやって来ました。そして1979年初め、パゴダは正式に開設します。開設時には、サヤマ・ドォウ ムヤ・トゥーイン（ウ・バ・キンのセンターで生徒指導の手伝いをしていた女性）やその夫、ウ・チット ティン（ウ・バ・キンの下で政府の仕事に従事）の姿もありました。

そしてまもなく、さらなる新展開があります。ゴエンカ師が、西洋で初めてのコースを指導するため、飛行機で出国したのです。10年前にゴエンカ師を招待したフランス人女性が師の言葉を覚えていて、再び連絡を取ってきたからです。しかも今度は、フランス・ヨーガ指導者連盟からの招待状もついていました。

インドから世界へ

ゴエンカ師は、機が熟したと感じました。ダンマがミャンマーからインドへ戻るであろうという古代からの予言はすでに実現していましたが、その言い伝えにはもう一つの予言が

含まれていたのです。それは、ダンマがインドからさらに世界へと広がるであろうというものでした。それを果たす仕事が、まだ残っていたのです。

その仕事を始めるには、ゴエンカ師は他国への出国許可を取得する必要がありましたが、ミャンマー発行の彼のパスポートは、インドへの渡航に限り有効とするものでした。それ以前にも他国への渡航の許可を申請したことがありましたが、うまくいきませんでした。ゴエンカ師は、仕方なく、ミャンマーからインドに国籍を移すことを受け入れ、インドのパスポートを申請しました。母国として慕うミャンマーから、また一つ切り離されるのは残念でしたが、ダンマの使者として必要なことだったからです。

インド国籍取得後も、パスポートの取得は予想以上に難しいことでした。ダンマギリでゴエンカ師が何をしているのか、調査官は覆面調査のために何度もやって来たそうです。審査の一つ一つに時間を要し、手続きは遅れました。それでも最後の最後に障害は取り除かれ、ゴエンカ師とマタジは無事にパリ行き of 飛行機に搭乗できたのでした。ゴエンカ師がミャンマーからインドに到着した日から、ちょうど10年になる頃でした。

その年、ゴエンカ師はフランスで2回のコースを指導し、その後カナダで1回、イギリスで2回の指導を行います。大勢の古い生徒が参加しましたが、ヴィパッサナーを初めて学ぶ人もたくさんいました。コースを受けた内の何人かは、その冬、ダンマギリに渡りました。その後の20年間、これが恒例のパターンになりました。ゴエンカ師は毎年、海外に出向きました。ヨーロッパとアメリカのみならず、日本や台湾、オーストラリア、ニュージーランド、スリランカやタイへも訪れ、1990年にはようやく、ミャンマーに初めての帰国を果たします。

それらの場所、そして他の国々にも、ゴエンカ師の指導のもとにヴィパッサナーを学び、実践するための瞑想センターがつつぎとできていきました。

新たな視点

ゴエンカ師の使命は大きな進展を得ましたが、今度は新しい問題が生じました。ヴィパッサナーを学びたい人はあまりにも多く、師一人では指導が不可能になったのです。ゴエンカ師はたった一人で指導を行っていたから、いくら大人数のコースを設けても、担当できる生徒数には限りがありました。

解決策は、ただ一つです。1981年後半、ゴエンカ師は、彼の代理としてコースの指導を担当するアシスタント指導者の任命と育成に取りかかりました。コースには録音したゴエンカ師の指導テープを使用します。アシスタント指導者による初めてのコースは、この機会にぴったりの場所、巡礼者用のゲストハウスである、ブッダガヤ市内のミャンマー仏教僧院で行われました。ここでは、ゴエンカ師自身もかつて多くの時間を過ごしていました。数ヵ月後には、世界各地でコースが行われるようになりました。現在では、数百人ものアシスタント指導者が、150以上の瞑想センターやセンター外の施設を借りて、年に

約2500コースを担当し、参加者は15万人近くにもなります。1994年以降、ゴエンカ師はより深い経験のあるアシスタント指導者を一人前の指導者として任命していきます。そうした指導者は世界で300人以上になり、コースのプログラムや、瞑想センターを導いて奉仕しています。

このアシスタント指導者制度のおかげで、ゴエンカ師は他の大きなプロジェクトに目を向けられるようになりました。公の場や会議での演説にもいっそう頻繁に出席し、スイス・ダヴォスで開催された2000年世界経済フォーラムなどにも参加しました。またヴィパッサナー研究所を設立し、ブッダの教えを記録した最古の書、パーリ語のティピタカが世界多数国の言語で無料閲覧できるように、プロジェクトを進め完了しました。デリーのティハール刑務所はじめ、数多くの刑務所で囚人を対象としたヴィパッサナー・コースのプログラム監修も行い、自身も1994年4月、ティハールで実施された「1000人参加コース」を担当指導しました。また、子ども向けコースを開始したほか、ヴィパッサナーとブッダと教えに関する著作も多数著しました。師はさらに、ムンバイ郊外のグローバル・ヴィパッサナー・パゴダの建設も発起しました。このパゴダはヤンゴン市のシェウエダゴン・パゴダを模し、一回り小さくしたもので、多くの人がブッダの教えに魅了され、教えを学びたいと思うきっかけとなるように、と建てられたものです。またこれは、ミャンマーへの感謝の意と、ヴィパッサナーをインドに戻したサヤジ・ウ・バ・キンに感謝を表する記念碑でもあります。

年月が経つにつれ、ゴエンカ師のもとへたくさんの名誉や表彰が授与されるようになりました。師が受けた名誉称号は、「知識の海原」、「ダンマの灯火をかかげる者」、「教義のマスター」、「偉大な民間人ヴィパッサナー指導者」など、多数あります。ミャンマー政府とスリランカ政府には国賓として招待され、2012年にはインド政府から国民最高名誉の一つ、「パドマ・ブーシャン賞」（尊い蓮）を贈られました。ゴエンカ師は、これらの名誉はすべて、ダンマに向けて与えられた名誉であると主張しています。

最後の日々

晩年のゴエンカ師は、健康状態が衰えつつありました。車椅子に座り、深く朗々としたかつての声も弱まり、長い間話を続けるのは難しい状態でした。しかし、病気や老いの苦痛を感じながらも、ゴエンカ師が仕事をなおざりにすることはありませんでした。師は力の限りをつくしてダンマの指導を続け、人びとが瞑想に励むように尽力しました。

ゴエンカ師の名が広まり、ますます尊敬されるようになると、彼のことを他の伝統的なインドのグループのように崇め立てる人も現れました。これは、ゴエンカ師がつねに拒否していた扱いです。グローバル・パゴダを訪れると、まるで彼が魔法の力でも持っているかのように、人びとが押し寄せ、触ろうとします。このような振る舞いは、ダンマの使者という自分の使命とは全く無関係のものである、とゴエンカ師をがっかりさせました。2000年にニューヨークで行った講演の後、師は「私は、ただの普通の人間です」と述べています。インドでは指導者のことを「グループジ」と呼ぶのが習わしで、ゴエンカ師の生

徒にも、親しみをこめて彼をそう呼ぶ者も少なくありませんでした。しかし彼自身は、もしどうしても称号をつけるのなら、伝統的なパーリ語のキャリアナーミッタ（人の助けになる友）と呼ばれるほうを好んだそうです。

生徒たちが写真を撮るのは止められませんでした。カメラを向けられると、「何だって、私の写真はもうたくさんあるじゃないですか」とからかいました。冗談だけではなく、瞑想ホールはじめ、ヴィパッサナーセンターの公の場に自分の写真を飾ることは、一切許可しませんでした。悟りを開いたかと尋ねられると、こう答えました。「私が自分の心を怒りや憎しみ、悪意から解放した分だけ、その分解脱したといえるでしょう」ゴエンカ師は決して、何らかの特別な段階に達したと宣言することはなく、たとえ言うにしても、自分のもとに学びにきた人たちより、数歩先の道を進んでいる、と述べるのみでした。

コースの終わりに、生徒が感謝を述べにくることもよくありましたが、彼の返事は決まってこうです。「私は、ただの道具に過ぎません。ダンマに感謝しなさい。それから、頑張った自分に感謝するように」

2010年には、こうも述べています。「ダンマを運んだ人物より、ウ・バ・キンのほうがより大切なのです。昔、アショーカ大王の命を受けて、インドの近隣の国々にダンマを運んだ使者たちの名前は忘れ去られています。ですから同じように、ブッダの教えの時代である現在のみなさんは、ウ・バ・キン、ウ・バ・キンの名こそ、忘れずに覚えているように」

彼は、自分が忘れられようとも気にしなかったのです。

それでも彼のことを知る人たちにとって、ゴエンカ師は忘れがたい存在に違いありません。

ずっと以前、「ヴィパッサナーの鐘が打たれた」と、ウ・バ・キンは言いました。そして多くの人びとにとっては、サティヤ・ナラヤン・ゴエンカこそ、その鐘のメッセージを伝えた人物なのです。彼らにとってゴエンカ師は、知恵と人間愛、慈しみと無私の心、平静心に溢れたダンマの生きる証です。ゴエンカ師はよく、ダンマの優しさについて話しましたが、彼自身の優しさは、ちょうど詠唱しながらホールを去る時のあの声のように、いつまでも長く尾を引いて留まっています。「生きとし生けるものすべてが幸せでありますように・・・幸せであれ・・・幸せであれ・・・」と。

* * *

ゴエンカ師は9月29日、日曜の晩、インド、ムンバイの自宅で安らかに息を引き取りました。享年90で、その一生の半分をヴィパッサナー指導者としての奉仕に捧げました。ゴエンカ師の遺灰はムンバイでの火葬後、師が愛した母国へと送り戻すべく、ミャンマーに空輸し、イラワディー河に撒かれました。

この記事は、S.N.ゴエンカより任命を受けた指導者の一人であり、『生きる技』の著者でもあるビル ハートが書いたものです。記事には、ゴエンカ師の著文や演説文、ゴエンカ師との個人的な会話や、初期にゴエンカ師とともに瞑想した人たちの思い出話が含まれています。

ゴエンカ師との追想や写真、録音などをお持ちの方で、共有したいと思われる方は、記事編集係までご連絡ください。editor@news.dhamma.org